

保育課程から全体的な計画へ： 保育所保育指針に基づく編成の評価

From education and care curriculum to overall plan: an evaluation of creating a curriculum based on Course of Study and Life for Nursery School

米田 恵美子*

Emiko Komeda

清水 益治**

Masuharu Shimizu

本研究では、2008年3月に告示された保育所保育指針に基づいてある保育所が保育課程を編成した取り組みを紹介するとともに、その取り組みによる効果を数量的に検証した。2017年3月に告示される保育所保育指針では「保育課程」ではなく「全体的な計画」の作成が求められる。「保育課程」の研究を総括し、「全体的な計画の作成」に本研究がどのように貢献するかを論じた。

I. はじめに

「保育課程」は、2008年3月に告示された保育所保育指針で導入された概念である。CiNiiで「保育課程」をキーワードに論文を検索すると、69本の論文・論考が抽出された（平成29年2月6日現在）。2008年以降のものに限定すると、49本であった（重複して検索されているものを含む）。これらは、①保育課程とは何か、どのようなものかに関する研究、②保育課程をどのように編成するかに関する研究、③保育課程の応用・発展に関する研究の3つに大別できる。以下ではそれぞれについて概観する。

1. 保育課程とは何か、どのようなものかに関する研究

大坪（2008）は、保育所保育指針やその解説書に基づいて、保育課程とは何かや、その編成手順を具体的に述べた。堀井（2009）は、保育計画が保育課程になった意義について触れた後、変性の視点や含めるべき内容についてまとめている。穴戸（2010）は、保育課程の保育カリキュラムの部分を取り上げて、日本の保育カリキュラムには①環境構成型カリキュラム、②プロジェクト型カリキュラム、③設定保育型カリキュラムの3つの型があるとした。そして、これらのいずれかにとらわれてしまうのではなく、全体構造を構想する必要があると述べている。

石坂（2009）と大方（2009）は、乳幼児期における計画的な保育の必要性を説き、保育課程に関連づけている。勅使（2008）と丹羽（2008）は韓国、大津（2011）はフランスの保育課程を紹介し、日本の保育課程と比較している。田中（2010）は、保育課程を教授－学習過程として捉えることを提案している。深見（2011）は歴史的な視点から、余公（2011）は保育所保育指針の変遷から、保育課程を再考している。丹羽（2011）は、研究者や出版社、園の保育課

* 社会福祉法人宝山寺福祉事業団いこま保育園園長 ** こども学科教授

程に対する考え方をふまえて保育課程案の様式を提案している。

これらの研究は、現行保育所保育指針が定義する保育課程に対する比較的初期の研究と位置づけることができよう。

2. 保育課程をどのように編成するかに関する研究

小林ら（2009）は保育所保育指針やその解説書に沿った保育課程、木村（2009）は法人の理念をふまえた保育課程の作成過程を示している。尾花（2010）は平成11年の保育所保育指針のねらいと対応づけた保育課程を作成している。渡部・横松（2010）は、アクションリサーチの手法を用いて開発した、保育課程の作成手順を示している。清水ら（2011）は、保育所保育指針施行後半年（平成21年10月）の時点での保育課程の編成状況を調査し、次の3点を明らかにした。すなわち、①保育所保育指針施行後半年の時点では、保育課程を編成している保育所の割合は高くない、②編成しているところでも画一的なものが多い、③編成時に保護者の意向を把握することや編成された保育課程における保育の内容を評価することは、まだ進んでいないという3点を明らかにした。このうち②について、清水ら（2011）は、保育所の職員間で、様々なことに対して共通理解が得られていない可能性がある」と指摘している。

保育課程の編成の仕方について、全国社会福祉協議会は、雑誌「保育の友」で、特集を2回組んでいる。1回目は2009年で、「保育課程をどうつくる？」という特集であった。同協議会の関係園で試験的に保育課程を作成した上で（上村, 2009; 相澤, 2009）、天野・増田（2009）に対談で①子どもの最善の利益と園の個性が保育課程の土台になる、②保育課程が日々の保育や自己評価のよりどころになる、③全職員の設定した共通認識が編成の第1ステップになる、④保育課程で保育士の専門性と保育園の役割をより明確に社会に発信できると語らせている。この特集は、多くの園に独自の保育課程を作成する方向付けに大きく貢献したと考えられる。

2回目は2011年で、「私の園の保育課程」という特集であった。上村（2011）は、先の特集の際に試験的に作成した保育課程を指導計画に落とす上で苦労した点を述べている。菅沼（2011）は、公立には共通の保育課程がある中で職員間で保育観を共有し、園独自の保育課程の作成に向けた取り組みを紹介している。牧（2011）は、全職員の参加による保育課程の編成過程をまとめている。この特集は、園独自の保育課程の編成が園の保育の質の向上につながることを示唆するものである。

なお、これら特集以外にも、福井（2010）や吾孫子（2010）も保育課程作成が職員集団を育てるのに、内村（2016）はそれが園としての保育観の具現化に役だったと述べている。

保育課程をどのように編成するかに関する研究は、保育課程に関する研究の第2ステージである。編成の仕方を工夫することが保育者の資質の向上や保育所の保育の質の向上につながることを示唆される。

3. 保育課程の応用・発展に関する研究

小学校との連携には、保育課程・教育課程の編成が重要であると指摘する論文が公表されている。青木（2010）は、就学前教育と小学校教育における「音楽」の位置づけの違いを視野に入れた保育課程・教育課程の編成をめざすべきであると考えている。小山（2015）は、保育課程や教育課程等に基づく指導計画が、小学校における指導計画とどのようにつながるかを意識した書き方をすべきだと主張した。園田（2016）は、小学校との接続を意識した規範意識の育成を、保育・教育課程に位置づける必要性を説いている。これらの研究は、いずれも保育所保育指針や

幼稚園教育要領等と小学校学習指導要領に基づく主張であり、保育課程・教育課程の実態との整合性については今後の課題であろう。

保育課程を利用した評価の重要性も提唱されるようになった。堀田ら（2013）は、保育・教育課程に基づいて年間指導計画を立て、それを実践し、その結果を評価していくこと、さらにより良い計画を立案することが、配慮を要する子どものアセスメントや保育の形成的評価につながると述べた。森・横松（2014）は、新たな活動、論文内では「園外へ歩いて出かける活動」を保育課程の中に位置づけることが、カリキュラムマネジメントにつながると述べている。彼女らの言うカリキュラムマネジメントとは、各学校が国の基準を正確に把握した上で、PDCAサイクルを回すことであり、評価（C）に基づき、新たなサイクルを作っていくことである。

横松は一連の研究により、保育課程開発が園の独自性を強調することになり、職員の資質が向上し、経営にも役立つと主張している。渡邊・横松（2009）は、園史のふりかえりを保育課程の編成に活かすことが、保育士集団としての一体感を増やし、学び会える風通しの良い組織風土の形成につながると述べている。横松・渡邊（2009）は、園文化創造アドバイザーの存在が、園独自の保育課程開発を促すと主張した。横松ら（2011）と横松（2011）は、PDCAサイクルに載せて保育課程の見直しを行うことを保育課程経営として定義し、その経営を研究することが保育園保育を質的に向上させるとまとめている。さらに渡邊・横松（2012）は、保育課程開発が保育実践の自己評価観点を明確化するとして、その手順を明示している。これらの研究は、保育課程の編成が到達点ではないと主張している点が興味深い。

保育課程を保育者養成に活用する研究も公表されている。庭野（2011）は、2008年の保育所保育指針の改定に対応した教科書で「保育課程」を取り上げている12冊を分析した。その結果、保育所保育指針、保育所保育指針解説書、改定保育所保育指針Q & Aのいずれか、または複数を用いて説明していた教科書がほとんどであることが明らかになった。また庭野（2012）は、教科書に紹介されている保育課程が5領域のねらいと内容をどの程度含んでいるかを調べた。その結果、含まれているねらいや内容にかなりの偏りが見られ、100%含まれているねらいや内容もあれば、全く含まれていないものもあった。丹羽・池田（2012）は、保育課程論の授業で受講生に指導案を作成させた取り組みを紹介している。西島・笠野（2015）は、教育実践演習の履修カルテアンケートを利用して、保育課程・教育課程の意義や重要性をどの程度学んだかを短期大学生を対象に調査した。その結果、5段階で4、すなわち「保育課程・教育課程の意義や重要性を学び、保育計画の立案にあたっては子どもの発達過程をふまえた基本的な考え方を十分に習得することができた」が平均であった。これらの研究は、実践と養成をつなぐものとして、今後の発展が期待される。

以上、概観した保育課程の応用・発展に関する研究は、「保育課程の編成」が実践に留まらず、研究としても大きな広がりを持つことを示すものである。

4. 本研究の目的

本研究の目的は、保育課程の編成が職員に与える影響を示すことにより、今後求められる「全体的な計画」を編成する際に役立つ資料を提供することである。

先述の3つの研究はいずれも興味深い、それぞれが独立しており、橋渡しをする研究がない。本研究ではこれら3つの研究をつなぐことをめざす。具体的には、①現行の保育所保育指針が告示された直後にある園が行った保育課程の編成をふりかえり、②その編成が、当時、職員に与えた影響を量的に検証し、③その影響をエビデンスとして、本年度に求められる「全体的な計画」

を編成する際に、どのような点に留意すれば良いかを考える。

現行の保育所保育指針の告示直後に編成された保育課程は、作成にあたり参照する資料が限られていた。保育所保育指針、保育所保育指針解説書及び改定保育所保育指針Q & A程度しかなかった。このことは、オーソドックスな方法で編成したことを示すものであり、「全体的な計画」を編成する際にも一般化が可能と考えられる。また、当該園は、筆者が園長を務める園であるが、筆者自身も園長として着任直後であり、全職員が保育課程の編成に参画しやすい状況であった。さらに当該園は、仏教系の社会福祉事業団に属しており、保育理念が確立していた。このこともオーソドックスな編成方法を採用するのに功を奏した。これらの状況は、保育課程とは何か、どのようなものか、園の独自性を発揮しながら保育課程をどのように編成するかに関して、厚生労働省の当時の想定通りであったことを示唆するものである。

本研究では、保育課程の編成が職員に与える影響を、回想的に調べるアンケートを用いて数量的に調査する。先述の「保育課程をどのように編成するかに関する研究」で、編成の効果を数量的に測定したものはなかった。数量的な分析は、結果の一般化に役立つ。回想的に調べるのは、保育課程作成前に調査が困難であったためと、保育課程作成後に回想的に調べることで、判断基準が揃うと考えられたため（清水ら, 2013; 2014）である。

本研究は得られた数量的な結果をエビデンスとして、次年度に求められる全体的な計画の編成に資する資料を提供する。本年3月末には、新しい保育所保育指針、幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領が告示される。本稿執筆の時点では、指針の本文が示されていないので確たることは言えないが、「保育課程」ではなく「全体的な計画」になることが、社会保障審議会児童部会保育専門委員会による「保育所保育指針の改定に関する議論のとりまとめ」からはうかがえる。本研究では、この「全体的な計画」を視野に入れて考察する。

Ⅱ. 保育課程編成の取り組み

著者の園では、子どもの姿を捉え、法人のねらいである保育理念を子どもの生活や育ちに反映させながら、連続性のある園独自の保育課程を編成をすることにした。

1. 方法

子ども達の姿を適切に捉えるためにはどうすればよいか、また、その姿を踏まえてそれぞれの子どもの発達をどのように理解して計画を立てればよいのかについて、平成20年度10月から1ヶ月ごとに会議を持ち、具体的な進め方を検討した。そして、共通理解すべき内容として、①保育所保育指針・解説書の理解、②子ども、保護者、それを取り巻く環境の理解、③保育理念、目標、方針の理解、④一貫性のある子どもの発達過程の見通しの理解、⑤前年度までの省察、評価が反映された計画を作ることの5つを掲げた。その上で、次のような手順ですすめることにした。

（1）保育理念の年齢別検討

保育課程を編成するにあたり、まず保育理念を生かす内容を年齢ごとに捉え、それをさらに0歳から6歳までの育ちの過程と関連づけた内容を検討した。

（2）平成20年度の保育の計画の見直し

平成20年度の月の計画、評価、反省を年間表に表し、年間計画と対比し問題点をあげた。

（3）望ましい活動に基づく保育課程の編成

保育理念、問題点を総合して子どもの姿から発達に応じた望ましい経験のねらいをたてた。望ましい経験のねらいに基づき、保育課程を編成した。

2. 結果及び考察

1) 保育理念の年齢別検討

ここでは、これまでの保育計画に加えて保育課程に組み入れたい内容として園の保育理念の「生きる力、耐える力、喜ぶ力を育てる」を年齢別に検討した。

(1) 本園が目指す三つの力

まず、以下の三つの力を全員で確認した。

- ①「生きる力」：明るくのびのびと友だちと遊び強い子になろう（戸外遊び・お散歩・森の遊び・自然体験活動）。
- ②「耐える力」：何でも自分でやれる子、考える子になろう（食事・排泄・午睡など園生活の中で自立しいろいろなものを作って遊ぶ）。
- ③「喜ぶ力」：優しい思いやりのある子どもになろう（異年齢集団の交流の遊びから情操を豊かにする。達成感を味わう）。

次に、これらの力をふまえ、かつ養護と教育を子どもの発達から捉え、健やかな育ちや豊かな人間性を育成することを共通理解した。

(2) 保育理念に基づく年齢別ねらい

「生きる力」「耐える力」「喜ぶ力」は、集団の中で協力しての取り組みや、異年齢でかかわりあう遊び活動を通して育まれるようになってくると考え、三つの力のそなわった子どもを育てるため、日常生活における心身の成長を見直し、本園の保育理念に基づくねらいを0歳児から5歳児へと連続性を捉えて計画した。（表1）。

2) 平成20年度の保育の計画の見直し

ここでは、平成20年度の、月の計画、評価、反省を年間表に表し、年間計画と対比し、問題点の検討を行なうとともに、実際の子どもの姿との妥当性を検討した。その結果、月の評価や反省が次の計画へと生かされておらず、また、そのためか発達、成長を見通した計画になっていなかったという点が、浮き彫りになった（表2）。

そこで、21年度の計画を作成するにあたっては、これらの点を職員間で共通理解したうえで、0歳児から5歳児までの一貫した子ども像を明確にし、実際の子どもの成長、変化を反映した計画づくりをすすめていくようにした。

3) 望ましい活動に基づく保育課程の編成

本園の保育理念及び20年度の指導計画の振り返りの課題を省察しながら、子どもの姿から発達に応じた活動のねらいを検討した（表3）。その際、担当する前後の年齢クラスの子どもの姿や計画を確認し、表現を調整した。この活動のねらいを具体化し、保育課程として編成したものが表4である。

表1 保育理念に基づく年齢別ねらい

	生きる力	耐える力	喜ぶ力
0歳児	<ul style="list-style-type: none"> ・ミルクや母乳以外の味やスプーンに慣れ離乳食の量や種類を増やし無理なく離乳を進めていく ・保育士と信頼関係を育み安心してよく眠り、安心して生活をする 	<ul style="list-style-type: none"> ・特定の保育士と愛着関係を結び深める 	<ul style="list-style-type: none"> ・保育士とふれあいながら発達段階にあった好きな遊びを楽しむ ・寝返り、ハイハイ、伝い歩き、立つ、歩くなどの動きを楽しむ
1歳児	<ul style="list-style-type: none"> ・身の回りのことに興味を持ち、自分のできるところは介助されながらしようとする ・給食、おやつなど、スプーンやフォークをもちながら自分で食べようとする 	<ul style="list-style-type: none"> ・片付けを嫌がらずにする ・保育士に見守られながら、欲しいおもちゃを無理に取らないで少し待つ経験をする 	<ul style="list-style-type: none"> ・友だちと一緒に遊ぼうとする ・探索活動や、身体を動かすことを楽しむ ・「～したい」気持ちをもち「できた」という喜びを味わう
2歳児	<ul style="list-style-type: none"> ・生活に必要な身の回りのことができるようになる ・自分の思いをことばで伝えようとする ・散歩や戸外遊びを通して体力をつける 	<ul style="list-style-type: none"> ・友だちとおもちゃの貸し借りをする ・手洗い、排泄などみんなと一緒にしようとする ・たたく、ひっかく、かむ等の、してはいけないことを理解していく 	<ul style="list-style-type: none"> ・身の回りのことが徐々にできるようになる ・友だちに自分の思いを伝えられるようになる ・人と関わる楽しさを味わう
3歳児	<ul style="list-style-type: none"> ・意欲、「～したい」と自らが働きかけようとする力を育てる ・食べることを楽しみ、苦手なものを食べようとする ・さまざまな活動に興味関心を持って取り組む ・友だちや保育者に自分の思いや気持ちを言葉で伝える 	<ul style="list-style-type: none"> ・友だちとの関わりの中で、気持ちをコントロールしていく ・決まりやルールを知り、守ろうとする ・物の貸し借りができるようになる ・善悪の区別ができるようになる 	<ul style="list-style-type: none"> ・身のまわりのことが出来たことで自信を持つ ・友だちと一緒に遊ぶ楽しさを味わう ・遠くまで散歩に行ける。登れなかった遊具に登れるようになるなどの達成感を味わう
4歳児	<ul style="list-style-type: none"> ・周りのものに対する興味や関心を広げ、共有することで友だちとのつながりを感じる ・植物を育てたり、身近な動植物に触れたり、観察をすることで不思議さに気づいたり発見したりする ・「育てる活動」を通して、自分の身体に興味を持ち、自分や友だちの命の大切さに気づく 	<ul style="list-style-type: none"> ・友だちと関わる中で思い通りにいかない悔しい気持ちを繰り返し経験しながら自分の思いを伝えたり、相手の思いを聞いたりする ・自分からきまりやルールを守ろうとする気持ちを持つようになる ・ルールを守ること、友だちとの遊びが長続きし、発展できることに気づけるようになる 	<ul style="list-style-type: none"> ・集団でひとつのことをやり遂げたり、活動していく中で自分なりの目的が具体化し、それに向かって意欲的に取り組めたりすることを喜ぶ ・当番活動を通して、人の役に立てる喜びを感じられるようにする
5歳児	<ul style="list-style-type: none"> ・集団生活をする中で友だちを思いやる心や感動する心を育てる ・身体の仕組みに興味を持ったり、健康な生活に必要な生活習慣や態度を身につけたりする ・身体と食物の関係に興味を持ち、自分たちで出来る調理などの楽しさを知る 	<ul style="list-style-type: none"> ・集団の中で困難やトラブルに直面した時、友だちと励まし合い、協力しあって乗り越えようとする ・思ったことや、感じたことを伝えあい表現することを楽しみながら、友だちの気持ちに気づけるようにする 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分で考えたり、協力したりしながら主体的に遊びや生活に喜びを感じられるようにする ・友だちと一緒に目標に向かって協力する中でやり遂げる満足感や、達成感を味わう ・年長児としての自信や意欲を持ちさまざまな活動に取り組む喜びを味わう

表2 平成20年度の計画の検討課題

	検討課題
0歳児	<ul style="list-style-type: none"> ・ねらい、内容が実際に達成されていないこともあり、それらをふまえたうえで反省したものが翌月に反映されなかった。 ・ねらいと内容が対応できていない月があった。 ・0歳は、月齢により成長の違いが大きいため、全体的なねらい、内容について記入するのが難しかった。
1歳児	<ul style="list-style-type: none"> ・年間を通して次の年齢に繋がっていない計画であった。 ・保育士間の共通理解ができていない内容があった。 ・指導計画と子どもたちの姿が離れたものであり、発達が捉えられていなかった。
2歳児	<ul style="list-style-type: none"> ・ねらいや内容に、月によって表現の仕方が違い、統一性がなかった。 ・評価、反省が翌月に生まれていなかった。 ・一年間を通しての取り組みが継続しておらず、単発になっていた。 ・進級に向けての取り組みを計画に入れていなかった。
3歳児	<ul style="list-style-type: none"> ・「養護」のねらいに統一感がなく「教育」と曖昧になってしまった。 ・各領域ごとに内容が系統だっていない部分があった。 ・年間を通じての取り組みが継続しておらず、単発的になっていた。 ・評価、反省は概ねねらいに対応していたが、積極的に次の月に繋げるような反省まではできていなかった。
4歳児	<ul style="list-style-type: none"> ・「養護」「教育」の視点から見たねらいが継続して計画されていなかった。 ・その時々の子どもの様子や変化を踏まえた活動が盛り込まれておらず、独自性に欠けていた。 ・記入者が変わるため、月ごとの反省、評価が次の月の計画に引き継がれていなかった。 ・年間の取り組み、食育、体育あそび、鍵盤ハーモニカ、さつま芋の栽培、異年齢交流の内容が欠けていて、もう少し細かく指導計画に組み込んでいくと分かりやすいと感じた。
5歳児	<ul style="list-style-type: none"> ・ほぼ身辺自立が出来ているので「自ら進んで」などの細かい表現を計画に加えると分かりやすい。また、保育士間の共通理解もしやすい。 ・各月のねらいに「養護」と「教育」が区別して書けていなかった。 ・食育についての内容が抜けている月がいくつもあった。 ・月案を立てる前に、その月の子どもたちの姿を話し合う機会をしっかりと持てていなかった。 ・5歳児は、行事も多いので行事の内容に合わせた指導計画をもっと入れていくべきだと感じた。

表3 活動のねらい

	活動のねらい
0歳児	<ul style="list-style-type: none"> ・保育士が一人一人の気持ちを受け止め、丁寧に関わっていく中で愛着関係を育み安全で安心できる生活を送れるようにする ・保育士との信頼関係を基礎にして他の大人や友だち、身のまわりのものに興味関心が広がり、見たり聞いたり触れたりして関わりを広げ、探索を楽しめるようにする ・自分でしたいという気持ちを大切に、意欲を育てる
1歳児	<ul style="list-style-type: none"> ・身の回りのさまざまなものに興味関心を持ち体を動かしたりことばをつかたりすることを楽しむ ・簡単な身の回りのことを自分でしようとする
2歳児	<ul style="list-style-type: none"> ・生活に必要な身の回りのことが徐々にできるようになる ・保育士や友だちと体を動かして遊ぶ楽しさを知る ・自分の思いや要求をことばで伝えようとする
3歳児	<ul style="list-style-type: none"> ・山道の傾斜や階段などの高低を散歩することで、自然に足腰を丈夫にしてい ・園庭遊びや、散歩を通して異年齢児との交流を深める ・保育士が仲立ちとなり友だち同士の関わりを広げる
4歳児	<ul style="list-style-type: none"> ・一人一人の子どもの気持ちを受け止め、共感したり、励ましたりしながら安心して自己を発揮して生活できる環境をつくる ・身近な環境に興味を持ち、友だちと一緒に遊んだり生活したりする中で共に活動する楽しさや喜びを味わう ・ことばで思いを伝え合う経験を積む
5歳児	<ul style="list-style-type: none"> ・安定した生活のリズムの中で、ゆったりと安心して過ごせるようにする生活や活動の見通しがつくようになり、自ら進んで物事に取り組むようにする友だちとの関わりの中できなま意識を育む ・就学の喜びや期待を持って生活する

Ⅲ．取り組みの評価

1. 方法

(1) 協力者

2009年9月に筆者の園に所属していた33名の保育士を調査対象とした。このうち27名が以下に述べる調査に協力した。この27名の内訳は、次の通りであった。保育所における勤務年数は、「1年未満」が4名、「1年以上5年未満」が8名、「5年以上10年未満」が9名、「10年以上15年未満」が3名、「15年以上20年未満」、「20年以上25年未満」、「25年以上30年未満」がそれぞれ1名、「30年以上」が0名であった。担当する子どもの年齢は、「0歳児」が3名、「1歳児」が8名、「2歳児」が5名、「3歳児」が4名、「4歳児」が3名、「5歳児」が1名、「フリー」が3名であった。保育所における立場は、「主任」が1名、「リーダー」が5名、「サブリーダー」が2名、「担当」が14名、「その他」が5名であった。勤務形態は、「常勤」が13名、「非常勤（フルタイム）」が6名、「非常勤（短時間）」が8名であった。

(2) 材料

「自園の保育に対する理解度に関する調査」として、A4サイズで裏表1枚の調査票を作成した。「この調査は、保育課程の作成により、自園の保育に対する理解度がどのように変化したかを調べるものです。個人を特定するものではなく、結果は統計的に処理します。答えて下さった方にご迷惑をおかけしないよう万全の注意を払います。ご協力の程、よろしくお願いいたします。なお回答して頂いた調査票は、回収用小封筒に入れて密封の上、9月24日までに回収箱に入れてください。何卒よろしくお願い申し上げます」として、共同研究者らの名前を書いた。筆者の名前を書かなかったのは、園長の立場なので、何らかのバイアスがかかることを恐れたからである。

調査票は大きく5つの設問で構成した。Iの設問では、「自園の保育に対する、現在のあなたの理解度についてお尋ねします。それぞれの内容についての理解度を自己評価の上、1から6のうち該当する番号を○で囲んで下さい」として、図1に示す20の内容を示して6段階での評定

表 4 保育課程

[illegible]

を求めた。Ⅱの設問では、「自園の保育に対する、保育課程作成開始以前のあなたの理解度についてお尋ねします。それぞれの内容についての理解度を思い出して、自己評価の上、1から6のうち該当する番号を○で囲んで下さい」として、図1と全く同じ評定を求めた。なお、違いを強調するために、Ⅰの設問では「現在の」、Ⅱの設問では「保育課程作成開始以前の」の文字をボールド体にし、下線を引いた。

Ⅲの設問では、「作成された保育課程にそった保育を、あなた自身はどの程度展開できていると思いますか。100点満点で採点するとしたら、何点になりますか。0から100までの数字で答えてください」として数字を記入する欄を設けた。Ⅳの設問では、「保育課程の編成に関して思うところをご自由にお書きください」として自由記述の欄を設けた。Ⅴの設問は、フェイスシートにあたるもので、「最後に、あなたご自身のことについてお尋ねします。該当する記号を○で囲んで下さい」として、保育所における勤務年数、担当する子どもの年齢、保育所における立場、勤務形態を尋ねた。それぞれの選択肢は、協力者欄に示した通りであった。

(3) 手続き

調査票は2009年9月10日に配布し、同24日に回収した。分析は、共同研究者である清水が担当した。

	内 容	全く理解していない	理解していない	あまり理解していない	少し理解している	理解している	完全に理解している
1	園の保育理念	1	2	3	4	5	6
2	園の保育目標	1	2	3	4	5	6
3	園の保育方針	1	2	3	4	5	6
4	児童福祉法や児童福祉施設最低基準	1	2	3	4	5	6
5	保育所保育指針（以下、指針）第1章（総則）の内容	1	2	3	4	5	6
6	指針第2章（子どもの発達）の内容	1	2	3	4	5	6
7	指針第3章（保育の内容）の内容	1	2	3	4	5	6
8	指針第4章（保育の計画及び評価）の内容	1	2	3	4	5	6
9	指針第5章（健康及び安全）の内容	1	2	3	4	5	6
10	指針第6章（保護者に対する支援）の内容	1	2	3	4	5	6
11	指針第7章（職員の資質向上）の内容	1	2	3	4	5	6
12	担当する年齢クラスの子どもの発達の様子	1	2	3	4	5	6
13	担当する前後の年齢クラスの子どもの発達の様子	1	2	3	4	5	6
14	担当する年齢クラスの保育の内容（ねらいや内容）	1	2	3	4	5	6
15	担当する前後の年齢クラスの保育の内容（ねらいや内容）	1	2	3	4	5	6
16	園の周囲の地域の実態	1	2	3	4	5	6
17	園に通う子どもの家庭の状況	1	2	3	4	5	6
18	保育所から家庭への子どもの生活の連続性	1	2	3	4	5	6
19	保育所から小学校への子どもの発達の連続性	1	2	3	4	5	6
20	子どもの発達過程に応じた保育目標達成の見通し	1	2	3	4	5	6

図1 本研究で用いた理解度を調べる方法

2. 結果

表5は、自園の保育に対する現在と保育課程作成開始以前の理解度の平均評定値を示したものである。全員の値について対応のある平均の差の検定を行ったところ、すべての内容に関して、現在の方が保育課程作成開始以前よりも高かった。このことは、保育課程の作成によって自園の保育の理解が高まったことを示している。

調査票のVの3で、保育所における立場を尋ねていた。このうち主任、リーダー、サブリーダーは、ある意味で管理職である。そこで担任のみを対象に同じ分析を行った。その結果が表1の右である。同じ検定を行ったところ、2つの内容を除いて同様の有意差が見られた。すなわち、管理職でなく担任でも保育課程の作成によって自園の保育の理解が高まったと言える。有意差がなかった2つの内容は「5. 保育所保育指針（以下、指針）第1章（総則）の内容」と「7. 指針第3章（保育の内容）の内容」であった。しかしながら、平均値を見ると、これらの内容でも現在の方が保育課程作成開始以前よりも高かった。

次に勤務年数を区切って同様の分析を行った。協力者のところで述べたように、「1年未満」が4名、「1年以上5年未満」が8名、「5年以上10年未満」が9名、「10年以上15年未満」が3名、「15年以上20年未満」、「20年以上25年未満」、「25年以上30年未満」がそれぞれ1名と、「5年以上10年未満」が最も多く、それ以上は少なかった。そこで、5年未満と5年以上に分けて比較をすることにした。

表5 自園の保育に対する理解度の平均評定値

	全員(N=27)		担任のみ(N=14)	
	現在	作成開始前	現在	作成開始前
1 園の保育理念	5.0	4.2	4.9	4.3
2 園の保育目標	5.0	4.2	5.0	4.1
3 園の保育方針	4.8	4.2	4.8	4.2
4 児童福祉法や児童福祉施設最低基準	4.1	3.8	4.3	3.9
5 保育所保育指針(以下、指針)第1章(総則)の内容	4.4	4.0	4.6	4.2
6 指針第2章(子どもの発達)の内容	4.6	4.0	4.8	4.3
7 指針第3章(保育の内容)の内容	4.5	4.0	4.6	4.3
8 指針第4章(保育の計画及び評価)の内容	4.4	3.9	4.5	4.1
9 指針第5章(健康及び安全)の内容	4.4	4.0	4.6	4.2
10 指針第6章(保護者に対する支援)の内容	4.4	4.0	4.6	4.1
11 指針第7章(職員の資質向上)の内容	4.7	4.0	4.8	4.1
12 担当する年齢クラスの子どもの発達の様子	5.4	4.7	5.4	4.6
13 担当する前後の年齢クラスの子どもの発達の様子	4.9	4.2	5.0	4.1
14 担当する年齢クラスの保育の内容(ねらいや内容)	5.1	4.5	5.2	4.4
15 担当する前後の年齢クラスの保育の内容(ねらいや内容)	4.4	4.0	4.5	4.0
16 園の周囲の地域の実態	4.4	4.1	4.6	4.1
17 園に通う子どもの家庭の状況	4.4	4.2	4.6	4.1
18 保育所から家庭への子どもの生活の連続性	4.6	4.0	4.6	3.9
19 保育所から小学校への子どもの発達の連続性	4.4	3.6	4.4	3.6
20 子どもの発達過程に応じた保育目標達成の見通し	4.7	3.8	4.6	3.7

表6は、自園の保育に対する現在と保育課程作成開始以前の理解度の平均評定値を、勤務年数が5年未満の者(N=12)と5年以上の者(N=15)に分けて示したものである。2(勤務年数)×2(評定期間)の分散分析の結果、すべての内容で評定期間の主効果が有意であった。現在の方が保育課程作成開始以前よりも平均値が高かった。「13. 担当する前後の年齢クラスの子どもの発達の様子」では経験年数の主効果が有意であり、5年以上の者(平均4.8)が5年未満の者(平均4.3)よりも平均値が高かった。

表6 勤務年数別に見た自園の保育に対する理解度の平均評定値

	5年未満		5年以上	
	現在	作成開始前	現在	作成開始前
1 園の保育理念	5.0	4.2	4.9	4.4
2 園の保育目標	4.9	3.9	5.0	4.5
3 園の保育方針	4.8	3.9	4.8	4.5
4 児童福祉法や児童福祉施設最低基準	4.1	3.8	4.1	3.7
5 保育所保育指針(以下、指針)第1章(総則)の内容	4.4	3.9	4.5	4.1
6 指針第2章(子どもの発達)の内容	4.4	3.9	4.7	4.1
7 指針第3章(保育の内容)の内容	4.3	3.9	4.6	4.1
8 指針第4章(保育の計画及び評価)の内容	4.3	3.7	4.5	4.1
9 指針第5章(健康及び安全)の内容	4.3	3.8	4.6	4.1
10 指針第6章(保護者に対する支援)の内容	4.3	3.8	4.5	4.1
11 指針第7章(職員の資質向上)の内容	4.5	3.9	4.7	4.1
12 担当する年齢クラスの子どもの発達の様子	5.6	4.5	5.3	4.9
13 担当する前後の年齢クラスの子どもの発達の様子	4.7	3.8	4.9	4.6
14 担当する年齢クラスの保育の内容(ねらいや内容)	5.4	4.3	5.1	4.6
15 担当する前後の年齢クラスの保育の内容(ねらいや内容)	4.5	3.8	4.4	4.2
16 園の周囲の地域の実態	4.6	4.2	4.2	4.1
17 園に通う子どもの家庭の状況	4.6	4.2	4.4	4.1
18 保育所から家庭への子どもの生活の連続性	4.8	3.7	4.4	4.1
19 保育所から小学校への子どもの発達の連続性	4.5	3.3	4.4	3.9
20 子どもの発達過程に応じた保育目標達成の見通し	4.6	3.4	4.7	4.2

4つの内容では、交互作用が有意であった。多重比較の結果、「12. 担当する年齢クラスの子どもの発達の様子」、「18. 保育所から家庭への子どもの生活の連続性」及び「19. 保育所から小学校への子どもの発達の連続性」では、5年未満の者でのみ、現在の方が保育課程作成開始以前よりも平均値が有意に高かった。5年以上では有意差はなかった。「20. 子どもの発達過程に応じた保育目標達成の見通し」では、保育課程作成開始以前でのみ、5年以上の者が5年未満の者よりも平均値が有意に高かった。現在では有意差はなかった。

続いて、勤務形態による差を分析するために、「常勤」の13名と「非常勤」(「非常勤(フルタイム)」6名、「非常勤(短時間)」8名)の14名を比較した。2(勤務形態)×2(評定期期)の分散分析の結果、すべての内容で評定期期の主効果が有意であった。現在の方が保育課程作成開始以前よりも平均値が高かった。「20. 子どもの発達過程に応じた保育目標達成の見通し」では交互作用が有意であった。平均値を示したものが図2である。この図からわかるように、常勤の方が非常勤よりも現在と保育課程作成開始以前の差が顕著であった。

担当年齢による差を分析するために3歳未満児担当の16名と3歳以上児担当の7名を比較し

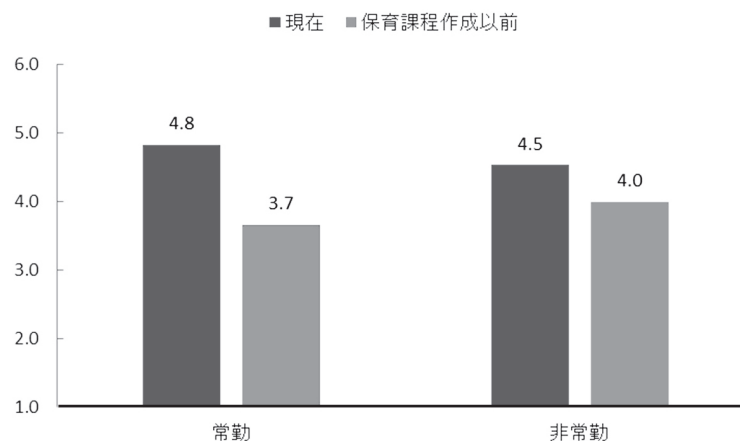


図2 「20. 子どもの発達過程に応じた保育目標達成の見通し」の交互作用

た。2（担当年齢）×2（評定期）の分散分析の結果、「16. 園の周囲の地域の実態」を除くすべての内容で、評定期の主効果が有意であった。現在の方が保育課程作成開始以前よりも平均値が高かった。「16. 園の周囲の地域の実態」では交互作用に傾向が見られ、3歳未満児では、現在の方が保育課程作成開始以前よりも平均値が高かった。

最後に、保育課程に沿った保育がどの程度展開できているかの評定と、保育の理解度に対する評定の相関を調べた。すべての内容で有意な相関は見られなかった。

IV. 総合考察

1. 本研究の意義

（1）発見の意義

本研究では、保育課程の作成には、保育者の資質向上と当該園の保育の質の向上という効果があることが示された。この結果は、従来の研究（上村、2011；菅沼、2011；牧、2011；渡邊・横松、2009；横松・渡邊、2009；横松ら、2011；横松、2011、2012）で報告されてきたことと一致する。

本研究の大きな特徴は、それを数値として示したことである。数値で示すことにより、効果の個人差を特定できた。例えば本研究では、経験年数が5年未満の保育士にとって「12. 担当する年齢クラスの子どもの発達の様子」、「18. 保育所から家庭への子どもの生活の連続性」及び「19. 保育所から小学校への子どもの発達の連続性」では、作成の効果が顕著現れることや、「20. 子どもの発達過程に応じた保育目標達成の見通し」では作成開始前に5年未満の保育士の理解が低いことを示すことができた。保育課程の作成は、経験年数が少ない保育士の資質の向上に役立つと言える。

（2）出版の意義

本年3月末には、新しい保育所保育指針、幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領が告示される予定である。これらの告示によって、保育所、幼稚園、幼保連携型認定こども園といった幼児教育にかかるすべての公的施設が「全体的な計画」を作成するようになる。本研究が、これらの告示のタイミングで出版されることには3つの意義がある。1つは、全体的な計画の作成そのものに資することである。告示や解説書及びQ & Aを読み、それらに従って必要な内容を計画にすべて盛り込むことが可能であり、それが保育の質の担保につながる。

2つ目は、職員の資質向上に資することである。本研究では保育課程の編成時に、編成の仕方を工夫することにより、職員間で様々な共通理解が可能であることを示した。今後は、いかに編成するのかに焦点を当てて、編成計画を立てることが望まれよう。職員の資質のどこを伸ばすかをあらかじめ考えた上で、編成に臨むことが功を奏すると考えられる。

最後は、保育課程の研究を総括したことである。保育課程が全体的な計画になることにより、保育課程の研究は収束するであろう。本研究は、2008年以降の保育課程に関する研究のほとんどすべてを概観した上で、3つの研究をつなぐものとして出版された。

（3）社会的な意義

一般に、研究が社会に還元されるにはかなりの時間がかかる。出版までに時間がかかり、出版後、同分野の研究者に理解されるまでに時間がかかり、さらに研究内容が関係者に周知されるまでに時間がかかり、加えて、たとえ周知されても実施されるまでに時間がかかるからである。時間の経過とともに、研究の価値は薄れる。研究者の興味も次に移ってしまう。

しかしながら本研究の場合は、保育課程が全体的な計画に変わることは既に公表されている。

保育課程の作り方は2008年3月の保育所保育指針の告示や保育所保育指針解説書の出版によっておおむね周知されていると考えても良いであろう。全体的な計画の作り方が保育課程と異ならないなら、告示やその解説に沿って全体的な計画を作成することで、本研究と同じ効果が得られると期待できる。本研究はその効果を保障する役割を担うものである。

2. 応用・発展

(1) 学校教育分野への応用・発展

平成28年12月21日に中央教育審議会は「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」を取りまとめた。この中に、「各学校における「カリキュラム・マネジメント」の確立」とある。今後は、各学校にカリキュラムマネジメントが求められるのである。ここでいうカリキュラムマネジメントとは、「学習指導要領等を受け止めつつ、子供たちの姿や地域の実情等を踏まえて、各学校が設定する学校教育目標を実現するために、学習指導要領等に基づき教育課程を編成し、それを実施・評価し改善していくこと」である。

本稿で取り上げた保育所は、保育課程の編成の時点で、すでにカリキュラムマネジメントを行っている。「保育所保育指針等を受け止めつつ、子供たちの姿や地域の実情等を踏まえて、園が設定する保育理念や目標を実現するために、保育所保育指針等に基づき保育課程を編成し、それを実施・評価し改善」してきているからである。おそらく本園のように、保育課程を編成した保育所は、すべてカリキュラムマネジメントをおこなってきているのであろう。

このように考えると、本研究はこれからの学校教育分野に応用・発展できる。各学校が本研究で実施したように、カリキュラムマネジメントを経て、教員の成長を数値化したり、教育課程編成の効果の個人差を調べることができよう。

また中央教育審議会は、平成27年12月21日に「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～（答申）」をとりまとめた。この中には、「チームとしての学校の在り方」も議論がまとめられている。そこには、「教員が多様な専門性を持つ人材等と連携・分担してチームとして職務を担うことにより、学校の教育力・組織力を向上させることが必要であるが、その役割の中心を担う教員一人一人がスキルアップを図り、組織の一員としてその役割に応じて活躍することができるようにすることとそのため環境整備を図ることが極めて重要である」とある。本研究で行った保育課程の編成方法やその評価方法は、チーム学校の体制構築にも貢献するであろう。

(2) 異分野への応用・発展

保育と学校教育の分野は、比較的近い分野である。本研究は全く異分野にも応用・発展が可能である。本研究のきっかけとなった保育課程の作成は、法令である保育所保育指針の改定により、実施義務となったことである。しかも保育士個人の実施義務ではなく、各園に実施することが求められた。この事態、すなわち、制度改正により各事業所に新たなことが求められるという事態は、あらゆる分野で起こる可能性がある。

本研究では、改正を全職員に呼びかけ、取り組み、評価し、成果を報告した。逆に考えれば、制度の改正は、職員の資質や業務の質の向上のチャンスと捉えることができる。あらゆる分野で、制度改正を機に、職員の資質や業務の質の向上を図ることができれば、よりよい業務が遂行できる。本研究で用いた成果の測り方が、多くの分野で活かされることを願っている。

引用文献

- 吾孫子幹：保育計画を作成するにあたって大切にしたいこと—保育課程と指導計画を考える（特集 第 49 回全国保間研・福岡集会提案）—（分科会提案 保育計画）季刊保育問題研究、242、pp.267-270、2010.4.
- 相澤千枝子：千早第一保育園における保育課程作成にかかる迷走（特集 保育課程をどうつくる？）保育の友、57、pp.16-21、2009.2.
- 天野珠路・増田まゆみ：対談 保育課程をどうつくる？（特集 保育課程をどうつくる？）保育の友、57、10-11、pp.21-25、2009.2.
- 青木美智子：保育所・幼稚園・小学校における教育の方法としての「音楽」—保育課程・教育課程の連携を見据えて 桐朋学園大学研究紀要、36、pp.123-140、2010.
- 勅使千鶴：大韓民国の標準保育課程と 2007 年改定幼稚園教育課程：作成過程での理論的・実践的検討内容と課題（第 8 回国際交流委員会企画シンポジウム、第 3 部委員会報告）保育学研究、46、pp.312-321、2008.12.
- 深見俊崇：保育におけるカリキュラム 保育研究、39、pp.18-23、2011.3.
- 福井茂：職員全体でつくる保育計画—保育課程づくりから学ぶ（特集 第 49 回全国保間研・福岡集会提案）—（分科会提案 保育計画）季刊保育問題研究、242、pp.260-263、2010.4.
- 堀井二実：保育ゆめ未来 新「保育所保育指針」のポイント—「保育課程」をどう考えるか はらっぱ、296、pp.13-15、2009.6.
- 堀田千絵・花咲宣子・堀田伊久子：保育・教育課程に基づく年間指導計画の形成的評価とアセスメントの重要性：3 歳から 4 歳における人物画を題材にした指導計画の創案と個別の指導計画の活用 関西福祉科学大学紀要、17、pp.15-31、2013.
- 石川洋子：実習生の教育課程・保育課程の理解と子ども理解：「人間関係」にかかわる事項を中心として 文教大学教育学部紀要、49、pp.53-60、2015.
- 石坂孝喜：保育所での乳幼児の生活体験と自立—日常生活体験の保育プログラム化にむけて 生活体験学習研究、9、pp.23-30、2009.1.
- 木村たか子：保育課程作成の事例 関東短期大学紀要、53、pp.137-163、2009.
- 小林小夜子・三村三代子・前田美保子：保育所保育指針改定（平成 20 年 3 月）に伴う保育課程の編成—M 保育園の場合 長崎女子短期大学紀要、33、pp.95-105、2009.
- 小山優子：保幼小の教育保育課程と指導計画の比較分析：小学校の教育課程と幼保の保育内容の変遷から しまね地域共生センター紀要、2、pp.33-43、2015.10.
- 牧裕子：みんなでつくった保育課程（特集 私の園の保育課程）保育の友、59、pp.21-25、2011.2.
- 森英子・横松友義：保育園の「園外へ歩いて出かける活動」に関する保育課程編成時の留意点：カリキュラムマネジメントの観点からの考察 教育実践学論集、15、pp.101-111、2014.3.
- 西島宣代・笠野恵子：保育学への姿勢：「保育方法論」ならびに「保育課程論」に見る学生のアンケートシート分析結果 中九州短期大学論叢、38、pp.45-58、2015.10.
- 丹羽孝：韓国標準保育課程制定の意義とその特徴 保育の研究、22、pp.79-85、2008.3.
- 丹羽孝：保育所保育課程の研究 名古屋市立大学大学院人間文化研究科人間文化研究、14、pp.1-23、2011.2.
- 丹羽やエ子・池田舞：「保育課程論」の授業における指導計画作成：単元保育指導案をとおとしての学びと考察 永原学園西九州大学短期大学部紀要、43、pp.55-67、2012.
- 庭野晃子：「保育課程」の内容に関する一考察：保育所保育指針（2008）に対応した教科書分析（1）静岡県立大学短期大学部研究紀要、25、pp.39-51、2011.
- 庭野晃子：教科書に掲載された「保育課程」における 5 領域の分析と評価 静岡県立大学短期大学部研究紀要、26、pp.1-14、2012.
- 尾花雄路：N 保育園における保育課程（3 歳以上児）の作成—保育所保育指針（平成 20 年）に沿って 福岡

- 女子短大紀要、73、pp.1-16、2010.1.
- 大島波枝："絵にかいた保育課程"の過程(特集 第52回全国保育問題研究・静岡集会提案)―(分科会提案)季刊保育問題研究、260、pp.250-253、2013.4.
- 大方美香:乳児保育における保育の計画 大阪総合保育大学紀要、4、pp.129-144、2010.3.
- 大津尚志:フランスの保育課程改革と保育の質の向上の追究(特集 諸外国の保育―保育の質向上の取り組みと実際)保育の友、59、pp.14-17、2011.8.
- 大坪祥子:保育課程とその編成 宮崎学園短期大学紀要、1、pp.45-58、2008.
- 穴戸健夫:保育カリキュラム(保育課程)について考える―保育カリキュラムの構想 保育の研究、23、pp.1-8、2010.6.
- 清水益治・小椋たみ子・鶴宏史・南憲治:保育所における保育課程の編成に関する研究 帝塚山大学現代生活学部紀要、7、pp.117-132、2011.2.
- 清水益治・小椋たみ子・松尾純代・鶴宏史:DVDを用いた子どもとのかかわり記録作成の効果 帝塚山大学現代生活学部紀要、9、pp.53-64、2013.2.
- 清水益治・小椋たみ子・鶴宏史・松尾純代:DVDを用いた子どもとの関わり記録作成の効果Ⅱ 大学現代生活学部紀要、10、pp.123-137、2014.2.
- 園田雪恵:規範意識の育成に関する保育・教育課程の意義の検討―幼小接続期の集団場面に焦点をあてて 夙川学院短期大学研究紀要、43、pp.3-17、2016.3.
- 萱沼マサ子:保育が楽しくなる「保育課程」編成の取り組みと実践への生かし方(特集 私の園の保育課程)保育の友、59、pp.16-21、2011.2.
- 田中亨胤:幼児教育カリキュラム・シフトの位相とパラダイム―教授―学習過程の可視化への試み 京都文教短期大学研究紀要、49、pp.60-66、2010.
- 内村真奈美:保育課程の編成を通して:保育観の具現化の試み(特集 保育計画・指導計画)保育の実践と研究、21、pp.9-14、2016.
- 上村初美:砂山保育園における保育課程作成の実際(特集 保育課程をどうつくる?)保育の友、57、pp.12-15、2009.2.
- 上村初美:保育課程編成への取り組みと計画実践の課題(特集 私の園の保育課程)保育の友、59、pp.11-15、2011.2.
- 余公敏子:保育所保育指針の変遷と保育課程に関する考察 飛梅論集、11、pp.41-57、2011.3.
- 横松友義:保育課程経営研究の提唱 岡山大学大学院教育学研究科研究集録、148、pp.1-6、2011.
- 横松友義・渡邊 祐三:各保育園におけるこれからの保育課程開発のための園文化創造アドバイザーの支援に関する考察 岡山大学大学院教育学研究科研究集録、141、pp.29-42、2009.
- 横松友義・渡邊祐三・森英子・伊勢慎・豊池利江・斎藤健司:保育目標のとらえ方と保育実践の両者を質的に向上させる保育実践開発に関する考察 岡山大学大学院教育学研究科研究集録、147、pp.125-133、2011.6.
- 渡邊祐三・横松友義:園史の振り返りをとおして保育士に生じる意識変化に関する考察 岡山大学教育実践総合センター紀要、9、pp.9-18、2009.
- 渡邊祐三・横松友義:実効のある保育目標及び保育全体の理論的枠組みを前提にした保育課程編成手順の開発:私立御南保育園でのアクション・リサーチをとおして カリキュラム研究、19、pp.85-98、2010.3.
- 渡邊祐三・横松友義:保育課程に基づく保育実践の自己評価観点明確化手順の開発:私立御南保育園でのアクション・リサーチ 教育実践学論集、13、pp.137-146、2012.3.

謝 辞

保育課程を作成し、見直し、改定し続け、現在も園の保育を支えてくださっているいこま保育園の先生方に厚くお礼申し上げます。

本研究の表 1、表 2、表 3 は、全国保育士会「第 19 号」研究紀要 2009 (pp.120-127) で発表したものである。この発表の準備に際して、神戸松蔭女子学院大学の寺見陽子先生には、貴重な助言を頂きました。記して感謝の意を表します。